

# 錢形平次捕物控

影法師

野村胡堂

青空文庫



## 發端篇

## 一

「親分、變なことを聴きましたかね」

ガラツ八の八五郎は、薰風くんぷうに鼻をふくらませて、明神下の平

次の家の、庭先から顎を出しました。いとも長閑のどかな晝下りの一  
齣ま。

「お前の耳は不思議な耳だよ、よくさう變つたことを聴き出せるものだ。俺の方は尋常なことばかりさ、蒔まいた種は生えるし、借りた金は返さなきやならねえし」

平次は氣のない返事をしながら、泥鉢どろばちに出揃つた、朝顔の芽をいくつかしんでゐるのです。

「あつしの方はまた、變つたことばかり、手紙をやつてもあの娘こは返事をくれないし、借金は溜つても、拂ふ氣になれないし」

「あんな野郎だ、——ところで、その變つたことと言ふのは何んだえ」

平次は手の泥を拂つて、椽側に腰をおろし腹ん這ひになつて、煙草盆を引寄せるのです。

「こいつは變つてますよ。影法師に憑つかれた話なんですが——」

「影法師に憑つかれた？」

成程それは話が變り過ぎてゐます。

「四ツ谷の與吉が、淺草へ行く道みちついで序に、半日無駄話をして歸りましたが、その時の笑ひ話ですよ」

江戸中にまかれた何百人の岡つ引は、八五郎に好意を持たないものはなく、わけても腕に自信のない者は自分の縄張り内に起つた事件の匂ひを、八五郎の耳に入れて置けば、親分の錢形平次が乗出してくれないものでもなく、平次が動き出せば、自分も飛んだ手柄のお裾すそわけくらゐにあり付けないものでもありません。

そんなことで、江戸中の面白い噂は、自然八五郎の耳に入り、八五郎の口から、斯う平次に取次がれることになるのです。

「影法師に憑つかれたといふのは、何處の誰だえ」

平次もいくらか好奇心を動かした様子です。

「市ヶ谷柳町の菊屋の倅彦太郎といふのが影法師が怖くて、月夜の晩などは、外へも出られないといふから可哀さうな話ぢやありませんか。あつしなんかは戀敵が多いから、怖いのは闇夜の晩だけで、ヘツ」

八五郎は自分の洒落に堪能して、長んがい顎を突き出すのです。

「自分の影法師が怖いのか」

「自分のなら、素性がわかつてゐるから、怖くも可笑しくも何

んともないが、不思議なことに、彦太郎といふ若い男の眼には、

何處の誰とも知れぬ、怪しい影法師が付き纏つてゐるといふので

すよ」

「はてね」

「外を歩いてみると、影法師だけが、フラフラと自分の前を歩いてゐたり、前の方が無事だと思つて、振り返つて見ると後ろから、ヒヨコヒヨコと影法師だけがついて來るといふんで」

「自分の影法師ぢやないのか」

「そんな事はありませんよ。彦太郎は十九になつたばかり、随分出來のやほな息子には違ひえねえが、自分の影法師と正體のない影法師を間違へる氣遣ひはありません。それに影法師の方は間違ひもなく女で」

「フーム」

「その影法師も、月夜の往來へ出るうちは良かつたが、この節は横着になつて、時々彦太郎の部屋の障子しやうじに映つたり、雪隠せつちんの

窓から覗いたり、おかげで彦太郎は近頃少し氣が變になつたといふ話で」

「その影法師は誰かに似てでもゐるのか」

「いんぐわ因果ですね、彦太郎には義理の父親、菊屋市十郎の二人めかけ妾のうちの、若くて綺麗なお袖そつくりといふから嫌ぢやありませんか」

「そのお袖といふのは」

「彦太郎と同じ年の十九、菊屋の親父が金に飽かして買ひ取つた妾で、飛んだ人身御供だといふ話で」

「いやな話だな。その話は、もうそれつきり忘れてしまえ」

「親分には、こんな話は面白くありませんかね。あつしなんか、



影法師でも生き靈りやうでも構はねえから、若くて綺麗な娘につき纏はれて見たいと思つてゐるんで」

「生憎、そんな野郎には、氣の弱い生き靈なんか取りつかないよ」  
「有難い仕合せで。その代り羅生門らしやうもん河岸へ行くと、青大將臭いのが五、六人首つ玉に噛かじりつく」

八五郎はそんな打ち壊しな事を言つて、あまり持てさうもない、長い顎を撫で廻すのでした。

## 二

この影法師事件は、十日も経たないうちに、思ひも寄らぬ大發展をしました。

五月に入つて、山の手の町に躑躅つづじが赤く燃えた頃、四ツ谷の與

吉——八五郎と馬の合ふ若い岡つ引が八五郎を引つ立てるやうにしてやつて來ました。

「親分、たうとう大變なことにりましたよ。與吉の野郎が、どうしても錢形の親分を引つ張り出してくれといふんで、あつしでは不足なんださうですよ」

八五郎はニヤニヤしながら、たいした不足らしい顔もせず、與吉に押し出されて木戸の中へ入つて來るのです。

「八五郎なら不足はねえ筈だが、自惚うぬぼれも腕つ節も、お小遣ひだつて、人に負けねえくらゐのたしなみはあるわけだが」

平次は面白さうでした。八五郎の相手でもしてゐたいほど、暇ひまでく仕様がなかつたのです。

「からかはないで下さいよ、親分。柳町の影法師は、たうとう人を害めあやましたぜ」

「何んだと？」

「詳しいくはことは、現場を見て來た與吉に訊いて下さい。御存じの通り、この野郎はあつしの倍も口が達者だから」

八五郎は身をかはしました。

「よし、それぢや歩きながら聽くとしようか」

お靜が丹精した新しいあはせ袷、十手を懷ろに忍ばせて、おろし立て

の麻裏の草履ぞうりをトンと踏みしめるとうなじ項から、切火の鎌の音が冴えます。

明神下から神樂坂へ、柳町へ抜ける道々は、すっかり夏でした。

薄着になつて、急に活々とした娘達の囀りや、遠い祭太鼓の稽古の音などを聴くと、江戸つ子達の胸はときめきます。

「殺されたのは、市ヶ谷柳町の金貸しで、萬兩の身代を持つてゐると言はれる、菊屋の市十郎。妾のお袖を相手に、裏二階で呑んでゐるところを、椽側から障子越しにズブリとやられたんで」

「フーム、凄いなア」

「障子の側でふざけた恰好なんかするものぢやありませんね。魔物は何處にゐるか、わかつたものぢやない」

與吉はそんな註を入れます。

「下手人の見當はつかねえのか」

「怪しい奴ばかりで、——尤も女房子のある市十郎が、同じ屋根

の下に二人も妾を飼つて、籤くじびき引で毎晩とぎ伽をさせるなんざ、助平  
なお大名のやりさうな事で、見せつけられる者は、誰だつて腹を  
立てますよ」

「その妾は無事だつたのか」

「階した下へ、お銚子てうしの代りを取りに行つたとき、ギヤツと來たんで  
すつて、二階にゐれば、金づくで人身御供に上がつてゐる妾だつ  
て、無事ぢや濟みませんがね。お袖と言つて十九になつたばかり  
の綺麗な娘で」

「もう一人の妾はどうしたんだ」

「年増の方は蛭なめくぢ蝸あまじほを甘鹽で三日ばかり煮込んだやうな女で、  
お吉と言ひますがね、自分の部屋で宵からの放樂寢で」

四ツ谷の與吉は、腕はたいしたことありませんが、口だけはなかくに辛辣しんらつです。

「外には」

「倅の彦太郎、こいつは一番怪しい男で、影法師に憑つかれて、青くなつてゐる若僧ですが、實は親父の妾のお袖に惚れて、氣が少し變になつてゐるから、何をやり出すか、わかりやしません。——仲間の者に頼んで氣をつけて見張らせてありますからね」

「倅が、親父の妾に何うとかするのは、少し不穩當ふをんたうぢやないか」  
「十九の青瓢箪あをべうたんが、穩當な惚れやうばかりはしてゐませんよ。」

それに、彦太郎は市十郎の本當の子ではなく、實は甥をひも甥、義理ある遠い甥なんださうで。市十郎は義理があるから、自分の娘の

お染と、行く／＼は一緒にして、跡取りにしようといふ話ですがね。一萬兩の身上を背負<sup>しよ</sup>つてゐても、十六になつたばかりの、薄あばたの家附の娘のお染より、親父の妾のお袖の方がよかつたんでせう。——このお袖といふ女はまた——」

四ツ谷の與吉はゴクリと固唾<sup>かたづ</sup>を吞みました。口こそ達者だが、精々二十七、八の與吉は、さり氣ない調子では、市ヶ谷中に響いた、菊屋の妾お袖の噂は出来なかつたのでせう。

「家の者はそれつきりか」

「まだありますよ。内儀のお世乃さんは諦め<sup>あきら</sup>きつた中年者で、人間は伶俐に違えねえが、女らしい匂ひの抜けた、氣の毒な人で」  
「あとは？」

「番頭の才さい八はちよいと男つ振りの好い三十男で、遊び好きで如じ才よさいがなくて、金さへありや、新宿の大門を一と晩でも閉めて見たいといふ、のぼせた野郎で」

「新宿の大門てえ奴があるか」

「吉原までは及びもつかねえ」

「落し話を聴かされてゐるやうだ」

「もう一人厄やくかい介なのがゐますよ。菊屋の主人と無二の仲で、猫ねこまたほほいん  
又法印 佐多田無道軒」

「大そうな名前だな」

「本人は山伏やまぶし崩れだと言つてはゐますがね。野伏せり見たいな野郎で、八卦けも祈きたう禱も禁呪まじなひも心得てゐる上に法螺ほらと武術の達人



で」

「妙な取合せだな」

「菊屋の用心棒に入り込んだのは一年前、おべつか將棋しやうぎの敗けつぷりが上手じやうずで、主人市十郎の御機嫌かなに叶かなひ、今では菊屋の支配人のやうな顔をしてゐますよ。尤も金もつとを借りて拂はないのがあると、ノコノコ出かけて行つて、門口で法螺ほらの貝を鳴らして調伏を始めるから、大概たいがいの無理をしても拂ふんださうで、良い術てがあつたもので」

四ツ谷の與吉は達辯にまくし立てるのでした。

### 三

柳町へ行つたのは、もう晝を過ぎてをりました。菊屋といふの

は、みせがまへ店構は至つて小さいしもたや暮しですが、住居の方は全く宏大極まるもので、ケチな大名の下屋敷ほどもあり、それを巧みにカムフラージュして、お上の眼に觸れないやうな贅澤振りは、人を喰つたその頃の町人の増長です。

平次の一行は、番頭の才八に迎へられて、奥へ通りました。與吉の朋ほうばい輩や子分で、土地の御用聞が二、三人、眼を光らせてゐるのと、御檢屍ごけんしが遅れて、葬とむらひの支度も出来ないの、家の中は火の消えたやう。あつちこつち彼方此方の隙間から、白い眼で見送つたり覗いたりするのが、棘とげでも刺されるやうに、敏感な平次に感ずるのでした。

世の中を敵にして、贅澤と淫蕩いんたうとの中に住んでゐた人間達の

生活が、人殺しといふ、一番露骨で決定的で、殘忍な事件に直面したために、銘々が自分自身の保護のために、堅い殻からの中に閉ぢ籠つてしまつたといふ心持です。

殺された主人市十郎の部屋は、恐らく何も彼もが、昨夜ゆうべのまゝだつたでせう。梯子はしごを登ると、磨き抜かれた四尺の廊下、それが眞つ直ぐに通つて、中程にある主人の部屋の外は、障子を染めた血が、クワツと眼に沁みます。

「この通り、主人は障子にもたれて、妾めかけとふざけながら酒を呑む癖があつたんだ。中は町人の住居の癖に、お上を盲目めくらにした書院風の作りで、床の前の柱に凭もたれると、丁度背中が此處に来る――」  
與吉は血に染んだ障子と、その障子の下から二尺五寸ほど上に、

突つ立てた刀の跡のあるのを指すのです。

「それにしちや、——」

平次は何やら考へてをりましたが、思ひ直した様子で、障子の中へ入りました。中はまことに慘<sup>さんたん</sup>憺たる有様で、検屍前の死骸は、僅かに隣りの部屋に取込んでありますが、盃<sup>はいばん</sup>盤と血潮と、手のつけやうのない混亂です。

「この通り、呑んでゐる最中、妾のお袖はお銚子を直しに階<sup>した</sup>下へ行つて、下女のお萬と無駄を言つてゐる間にやられたらしい」

「下女のお萬もさう言つてゐるのか」

「其處までは訊かなつたが、お袖のやうな綺麗なのに言はれると、ツイそれ以上せんさくをする氣がなくなる」

與吉は酢<sup>す</sup>つぱい顔で正直のところを言ふのです。

「灯りが一つしかないやうだが」

平次はフト、これほどの贅を盡した部屋に、燭臺が一つしかないことに氣が付きました。

「その代り百目蠟燭<sup>ろうそく</sup>が、晝のやうに點いてゐる。尤も、お袖は階下<sup>した</sup>へ降りる時、手燭くらゐは持つて行つたらしい」

與吉の説明は思ひの外行届きます。

「それにしても、障子越しに刺されたにしては、あまり血が飛<sup>し</sup>沫<sup>ぶ</sup>いちやゐないやうだが」

平次は先刻<sup>さつき</sup>から、それが不審でならなかつたのでした。ひどい血には違ひありませんが、一と太刀に急所を刺されると、血飛沫

はこんな事ではなかつた筈です。

それは兎も角として、與吉と番頭の才八の案内で、次の部屋に移してある、主人の市十郎の死骸を見せてもらひました。その頃の検屍は後の世ほどはやかましくはなく、末期の手當てのためと言へば、死骸を移したくらゐのことはうるさくは言はなかつたのです。

市十郎の死骸は、絹物の布團の上に寝かしてありました。見たところ背の低い脂肥りの五十前後、顔は死の苦惱もなく穩かおだやで、何んとなく愚鈍ぐどんにさへ見える表情です。恐らく物慾と女をんなあさ漁り以外は、何んの興味も持たない人柄でせう。

傷は背後から一と突き、ひだりかひがらばね左肩胛骨の下に、すあはせ素衾を通して、

恐ろしい正確さで叩き込んであります。

「刃物は？」

「隣りの部屋にあつた脇差、——こいつは何んとかいふ名作で、主人の市十郎が質に取つたが氣に入つて買ひ取り、押入に投り込んであつたのを使つたといふから、くせもの曲者は間違ひもなく家の中の者だね」

與吉は相變らず行届き過ぎるほどの註を入れるのです。

「それは何處にあるんだ」

「椽側に捨ててあつたのを、そのまゝにしてある筈だ。持つて來させようか」

「いや、宜い。後で見よう」

平次は立ち上がつて、二階の様子を念入りに調べました。部屋は三つ、居間と次の間と納戸なんどで、廊下は表と裏とにあり、表の様子は店の方に連なり、北側の狭い廊下は、お勝手へ降りる梯子に連なつてをります。妾のお袖が手燭てうしを持つて、銚子てうしを代へに行つたとすれば、裏の梯子を降りてお勝手へ降りたことになり、その間に曲者は、表の梯子を登つて、廊下傳ひに近づき、百目蠟燭ちふそくの灯に寫し出された、主人の影法師をたよりに、背後から障子越しに突いたものでせう。

#### 四

「どうだ、番頭さん。お前の見當で、下手人は誰だと思ふ。錢形の親分に、申し上げて置いた方が宜いぜ」



四ツ谷の與吉は、お節介らしく口を挟むのです。年は若くて、  
くわんろく貫 祿 もたいしたことはありませんが、八五郎などとは反對に、

恐ろしく才氣走つてゐるので、やがて良い御用聞になるだらうと、  
世間でも言ひ、自分もさう信じてゐるらしい男です。

「私にはそんな事は見當もつきませんが」

才八はモチモチしながら答へました。三十前後の、これはちよ  
いと好い男で、この柄がらと年輩で、毎日金を扱あつかふ商賣をしてゐるの  
ですから、随分遊びもし、罪を作つてゐることだらうと思はれま  
す。苦味走つて小作りで、愛嬌がある癖に、何處か抜け目がなさ  
さうでもあります。

「そんな事はあるまい。お前さんは、菊屋第一番の智者の働き

ものだといふ評判ぢやないか」

「飛んでもない、——尤も旦那は少し敵を作り過ぎました。良い方でしたが、金貸しといふ商賣は、どんな慈悲善根を積んでも、人様によくは申されません。お寺や社やしろに、寄進を一つなすつても、菊屋から金を借りてひどい目に逢つた方は、自分の拂つた利息で、石燈籠いしどうろうが立つたり石垣が出来たやうに思ひ込んでをります」

「成程ね」

平次はツイ合あひづち槌を打ちました。才八といふのは、さう言つた、物の考への皮肉ひにくな男だつたのです。

「昨夜、あの騒ぎのあつた時、お前さんは、店にゐたと言つたね」  
與吉は重ねて訊ねました。

「まだ宵でした。亥刻よつ（十時）前だつたと思ひます。その日の帳合ひの残りをして、これから寢ようといふ時」

「お前の部屋は？」

「店二階で。ヘエ、此處からは別棟べつむねではございませんが、この二階から店二階へは、梯子を降りて又登らなきや參られません」

「店にはお前さん一人であつたんだね」

「夜になると、店は私一人でございます。源介どんは日が暮れると、自分の家へ歸つてしまひますので」

源介といふのは、菊屋の通ひ番頭で、この事件には何んの關係もあるまいと、あとで與吉が説明してくれました。

この番頭と一緒に、菊屋で幅をきかしてゐるのは、法印ほふいんの無

道軒で、あれは猫又と綽名あだなのある強したか者、一と筋でいける男ではありません。

「何？ 岡つ引きが逢ひたい？ 俺は町方の岡つ引などに用事はない。用があるなら、寺社の御係りにさう言へツ」

四ツ谷の與吉が迎ひに行くと、階下したから怒鳴る聲が、二階まで筒つゝぬ抜けます。

「あんな事を言つてをります。口ほど人の悪い男ぢやございませんから、氣になさらないで下さい、親分」

番頭の才八が取りなし顔に言ふのを、

「いや、あんなのは反つて扱ひいゝよ。此方から行つてお目通りを願ふでしょうか」

平次は氣輕に立つて階下へ降りました。と、驚いたやうに隣りの部屋へ姿を隠したのは、二十二、三の好い年増、踊りをどの下地があるらしい身のこなしは輕快ですが、身體を動かす毎に撒き散まらしたらしい艶めかしい體臭と、激しい掛け香の匂ひが、芬ふん々ぶんとして隠しやうはありません。

「あれは？」

「お吉さんと言ひます」

才八は首をすくめました。が、續けて、

「主人を殺したら、あの匂ひではすぐ足がつきませう」

平次もツイ、苦笑ひをしてしまひました。この場合でも笑つて見たくなるやうな、それは厄介な匂ひでした。

階下<sup>した</sup>へ降りると、梯子<sup>はしご</sup>の下<sup>した</sup>の六疊に、與吉と法印無道軒が、まだ何んか言ひ合つてゐます。が平次の姿を見ると、

「錢形の親分、お聴きだらう。この男は大層威張つてゐるが、大概<sup>た</sup>こんな野郎は臭いに極つたものだ。遠慮なく洗ひ出して見てくれ」

四ツ谷の與吉はすつかり興奮して、事と次第では、法印無道軒を引つ括り<sup>くく</sup>さうにするのです。

「まあ、宜い。與吉兄哥<sup>あにい</sup>の前だが、岡つ引を相手に大きな口を叩く人間は、大概<sup>た</sup>馬鹿か底抜けの正直者にきまつたものだ。ね、御坊」

「御坊？」

佐多田無道軒は振り返りました。總髮ぶしやうひげに無精髻、眼が細くて

蟲喰ひ眉で、鼻がシラノ・ド・ベルジュラツク風で、唇の厚い、首の短かい、まことに怪奇な風貌ふうぼうです。こんなのは商人や職人にならずに、金貸しの用心棒になつたといふのは、まことに己れを知るもので、平次はツイ吹き出さうとするのでした。

「色氣のない呼名で氣の毒だが、そんなことで勘辨してくれ。——ところで、お前さんはこの家の何んだえ」

「主人市十郎の相談相手さ。用心棒と言つても宜い」

「その市十郎が殺されたんだぜ。下手人を捜しに來た俺達に手傳つてくれるのも、主人への義理といふものぢやないか」

「生きてゐるうちは主人市十郎に智慧と腕を貸したが、死ねば用

事のない俺だ」

「金貸しの手先か相談相手か知らないが、そいつは薄情過ぎるぜ」

「何？ 死んだ者に智慧や腕は要るまい」

「だがね御坊、變なことを言つたり、妙な素振そぶりがあつたりすると、

與吉兄哥は氣が短けえから、お前さんの法螺貝ほらがひくらゐぢや驚かないかも知れないぜ。素直に話に乗つたらどうだ」

「この無道軒に、妙な素振があるといふのか。聞き捨てにならぬことを吐かすと、錢形とは言はせぬぞ」

猫又の無道軒はいきり立ちます。

平次のからかつたのに對して、斯う眞面目にいきり立つたところ



ろを見ると、この法師一度は本物の修驗者だつたのかも知れませ  
ん。と同時に、この法師、思ひの外臆おくびやう病で人が良ささうでも  
あります。

「親分ちよいと」

八五郎が庭の方から聲を掛けます。

「何處へ行つてゐたんだ、暫らく見えなかつたぢやないか」

「與吉兄哥がついてゐるから、あつしは外廻りの噂を手一杯に搔  
き集めましたよ」

「さうか、そいつは有難かつた。下手人の見當はついたか」

「へエ、少しはね」

平次は庭下駄を突っかけて外に出ました。與吉はまだ、猫又法

印と、揉<sup>も</sup>み合つてゐる様子です。

「どんな事を聴き出したんだ」

廣い庭の植込みの蔭へ來ると、平次は菊屋の全景を眺めながら、

八五郎を促<sup>うなが</sup>します。

「曲者——といふほどの代<sup>しろもの</sup>物ぢやありませんが、どうもあつし

の見當ぢや、倅の彦太郎が怪しくなりますよ」

「フーム」

「若い妾<sup>めかけ</sup>のお袖と同じ年の十九、身體がひ弱くて、氣性だけは激

しい男ださうですが、どうも、前々から、お袖との間が怪しいや

うだ」

「いやな事だな」

「それに、殺された主人の市十郎と、倅の彦太郎は、親子と言っても、實は敵同士見たいなものですよ」

「？」

「彦太郎は先代の本當の甥をひで、市十郎夫婦の方が養子ですよ。黙つてゐても、物事が順當に行けば、菊屋の身しんしやう上は彦太郎のものになるかも知れないのに、お世乃といふ貰ひ娘に、ズルズルべつたり養子に入つた、番頭の市十郎が、菊屋の身上を自分のモノにして、世間や親類の手前、先代の主人の甥をひの彦太郎を倅せがれといふことにし、幸ひ男の子がないから自分の娘の薄あばたで不きりやうのお染と一緒にしようといふ企たくらみだつたんで」

「成程、世間によくある術てだな」

「彦太郎だつて、嬉しくも何んともありませんや。その上、自分と仲の良かった、町内一番の娘お袖を、召使ひといふ名儀だが、金づくで引入れて、めかけ妾にしてゐるんだから、彦太郎がモヤモヤしてゐるのも、無理はないぢやありませんか」

「そんな事で親殺しをしたといふのか？」

「待つて下さいよ、親分。あつしは親殺しの肩を持つわけぢやねえが、その上影法師といふ惱まし事があつたとしたら——」

「何んだえその影法師といふのは。やたら矢鱈に、この家は影法師が附まとき纏つてゐるやうだが」

「附き纏ひたくもなりますよ。殺された主人市十郎といふのは、脂あぶらぎつて女好きで、恥といふものを知らない上に、人を困らせる

のが大好きといふ、飛んでもない道樂があつたんです」

「フーム」

「毎晩籤くじ引で、夜の伽ときをする妾をきめると言ふことになつてゐるが、近頃は若い妾のお袖を可愛がり、お吉を追つ拂つて、日が暮れるとお袖を二階の自分の部屋に呼び入れ、夜中まで呑みながら勝手な振舞ひをするんださうで」

「――」

「もたれたり、ふざけたり、叩いたり、下手な小唄を歌つたり、見ちやゐられないんださうですよ」

「誰がそれを見てゐるんだ」

「近頃は生なま暖あたくて障子一と重だから、意地が悪くその惡ふざ

けが、町内何處からでも見えるんださうで、——ね、親分。その  
 築<sup>つきやま</sup>山の上に立つと、植込みの上から、主人の部屋は眞つ直ぐに  
 目の前でせう。每晚障子に映る悪<sup>うつ</sup>ふぎけを、この築山の上から、  
 誰が見てゐたと思ひます」

「お前ぢやあるまいな」

「<sup>せがれ</sup>倅の彦太郎ですよ。自分と仲がよかつたお袖が、父親と言つて  
 も敵同士のやうな市十郎のものになつて、勝手な事をされてゐる  
 のを、每晚見せつけられて、一體どんな事になると思ひます」

「俺に訊いたつて仕様があるまい」

「市十郎はまた、そんな圖を人に見せるのが好きでくたまらな  
 かつた。部屋の中にはわざと百目蠟<sup>らふそく</sup>燭を一本だけ、自分は床<sup>とこわ</sup>

側<sup>き</sup>の柱にもたれて、前へお袖を引きつけると、二人の影法師は、閉めた障子にくつきり、描いたやうに寫るといふから、惱ましいぢやありませんか」

八五郎の話はいかにも重要ですが、噂のかき集めにしては、いかに微に入り細を穿<sup>うが</sup>ちます。

「お前はそれを誰から聞いたんだ」

平次は靜かに反問しましたが、話が少しうま過ぎて、彦太郎をおとしい陷入<sup>こしら</sup>れるための拵<sup>こしら</sup>へごとのやうでもあります。

「家中の者は皆んな知つてゐますよ。番頭<sup>どへい</sup>の才八も、下女のお萬も、猫又法印も、内儀のお世乃も、その土堀<sup>どへい</sup>があつても植込みがあつても、あの二階は見晴しが良いから、町内何處からでも見透

しだから、夜になるとその見物人で、裏通りは押すなくの繁昌で」

「お前の言ふことは少し馬鹿々々しいな」

「嘘も掛引きありません。聴いたまゝ、元金もとをきつての話です

よ——そこで病みつくほどお袖に惚れてゐる彦太郎は、影法師に取り憑つかれたのも、無理はないぢやありませんか。寝ても影法師、起きてても影法師だ。障子一重の向うで、自分と言ひ交かはしたお袖が、父親とは名ばかりの獸物けだもののやうな男の餌になつて、勝手なことをされてゐるんだ」

「何んだ、お前まで影法師に憑かれてるやうだぜ。氣をつけるが宜いよ、八」



「すると、彦太郎の眼には、自分の部屋の窓にも、歩いてゐる往來にも、不意に影法師が現はれた。女の影法師ですよ、髪振り亂した野暮な女の姿ぢやない。島田に結<sup>ゆ</sup>つた、細つそりした影法師」

「彦太郎から聞いたのか」

「いえ、下女のお萬がさう言ひます。最初は本人の彦太郎も隠してゐたが、近頃は自分でも持て餘して、氣の置けない者には、さう言ふんださうですよ。——影法師はもう澤山だ、近頃は庭の築山へも行かないやうにして、夜になると外へ遊びに出たり、自分の部屋に籠<sup>かこ</sup>つたりしてゐるが、お袖さんの影法師が二階から脱け出して、私に附<sup>まと</sup>き纏<sup>まと</sup>つて來る——と」

「フーム」

「何んでもこの節は、半病人ださうですよ。可哀さうに」

「ところで、その彦太郎が、親殺しの下手人だといふのか」

「さう言ひきつちや可哀さうですが、どうもそんな匂ひがするぢやありませんか」

「おや、あれは誰だ」

平次は不意に植込みから出て、裏の物置の蔭を覗のぞきました。

「噂の彦太郎が、お袖と逢あひびき引してゐるぢやありませんか」

「主人の市十郎が死んだといふのに、まだ二人は、そんな事をしてゐるのか。若い者を脅おどかしちや悪いが、行つてみよう、八」

二人は庭をグルリと廻つて、裏の物置を左右から覗くやうに取り詰めました。

## 五

「あッ」

平次と八五郎に包圍された形になつて、お袖は立ち竦すくみました。  
美しいといふよりは、これは透すき通るやうな清潔で、玩具おもちゃの  
姉様人形のやうな可愛らしい娘でした。

「お袖と言ふんだね。誰と話してゐたんだ」

平次は靜かに訊ねます。こんな清潔な娘が、十九やそこひくで、  
狒ひ々のやうな五十男の玩具になつてゐることに、平次は十手捕繩  
を離れて義憤を感じます。金に物を言はせて、どんな冒瀆ぼうとく的な  
ことでもやり遂げようといふ男は、現に蟲のやうに殺されたので  
すが、その痛々しい犠牲者が、無邪氣な清潔な顔をさへして、目

の前に立つてゐるのです。

「ハ、はい」

お袖はひどくあわててをります。

「昨夜のことを、お前の口から聴きたいが——」

平次の調子の穏やかなのと、その顔には柔かな思ひやりの色があつたためか、お袖の口は思ひの外簡単に開けて行きさうです。

「旦那にさう申し上げて、お銚子を直しに、裏梯子を降りて参りました。お爛かんのつくうち、お勝手でお萬さんと話し込んでみると、二階からあの、變な聲が——」

お袖は自分の肩を抱くやうに、その時のことを思ひ出したか、ぞつと身を顫ふるはせるのです。

「お前は好きでこの家に奉公に來たわけぢやあるまい——家は何處だ」

暫らく經つて平次は、外の話題に入りました。

「ツイ少し先の、裏にあります、——半年ほど前からこの家へ——」

そんな話になると、お袖の話はひどく澁<sup>しぶ</sup>ります。

「で？」

「亡くなつた父さんの借りたお金を、お母さんがどうしても返せなかつたので——」

さう言ひかけて、お袖は黙つてしまひました。可愛らしいピンク色の唇が、心持ち顫<sup>ふる</sup>へてをります。

「これからどうするつもりだ」

「彦太郎さんは、旦那が死んだから、誰に遠慮もない、此處にてはろくな事はあるまいから、直ぐにも家へ歸れと言ひますけれど――」

「――」

「あの人は怖いし、後で何んとか言はれると、又お母さんが困るに極つてゐますから」

「あの人といふのは誰だ」

「――」

お袖は答へませんでした。が、それは番頭の才八ではなくて、ねこまたほふいん猫又法印の佐多田無道軒を指してゐるやうです。

「もう宜い、——が、この家には暫らく俺達があるから、心配することは無い。何處へも行かないやうにしてくれ」

「はい」

お袖は素直にうなづいて、家の方へ行つてしまひました。それと入れ代りに、

「逃げちやいけないよ、おい、女の子さへ素直に話してゐるぢやないか」

母屋の方に逃げて行つた、<sup>せがれ</sup>倅の彦太郎をつかまへて、八五郎はやつて來ました。

「八、手荒なことをするな」

平次は脅え<sup>おび</sup>きつてゐるらしい彦太郎を、撫<sup>なだ</sup>めるやうに迎へまし

た。

十九と言つても、同じ年のお菊よりは、反つて年弱としよわに見えるほどのひ弱い男で、端麗な顔立ちも心配やら恐怖やらに歪ゆがんで、まことに痛々しい少年でした。

「私は逃げたわけぢやありません。この人が——」

「宜いよ、この男は少しそゝつかしいだけなんだ。蔭ぢや、お前の味方で、氣の毒がつてゐたよ」

「——」

「ところで、主人の市十郎——と言へはお前の父親だが、大層仲が悪かつたさうだな」

「あれは、私の父親なんかぢやありませんよ。この家へ入入りん



で来て、勝手にふるまつただけで」

「フーム、それは手<sup>てきび</sup>厳しいな。兎も角死んだ人間だ、惡口を言つちや濟むめえ」

「――」

「お前とお袖は、わけがありさうだね。互ひに約束でもしたことがあるのか」

「――」

彦太郎は頑<sup>ぐわんこ</sup>固に黙り込んでしまひました。青白い顔、キラキラ光る眼、引締つた唇など、少し病的なものを感じさせます。

「打ち開けて話した方が宜いぜ。早く下手人を擧げなきや、お前も困るだらう」

「そんな事言ひたかありません、——あの人を殺したのだつて、誰だか私を知るものですか。尤も、私も、何べん殺してやりたいと思つたか——」

純情らしい彦太郎は、前に立つてゐる者の素姓も忘れて、こんな事を口走るのです。

「昨夜、お前は何處にゐたんだ。丁度あの頃だ」

「自分の部屋に寝てゐました。布團を被<sup>かぶ</sup>つてゐたのに、恐ろしい聲が——」

「お前の部屋は何處だ」

「母屋<sup>おもや</sup>の西の端」

「主人の部屋へ遠いのか」

「遠くたつて行かうと思へば、裏梯子を登つて、直ぐ行けますよ」  
この少年は自分から進んで、岡つ引の手綱たづなにも飛び込まうとするのです。

「お前は影法師に取り憑つかれてゐるといふ話を聞いたが、それは本當か」

「――」

彦太郎は又黙つてしまひました。

「その話を詳くはしく聴きたいが、どうだ」

「近頃は滅多に出ません。でも」

「何時頃から、そんなものが見えたのだ」

「二た月ばかり前、月の良い晩でした。用事があつて加賀様御屋

敷の御馬場を通つて來ると、目の前（藥王寺前やくわうじまへ）をスルスルと影法師が動くんです」

「どんな影法師だ」

「女の影法師です。大きな島田で」

「空を見なかつたか」

「何んか雲の影でも映るのかと思つて、空を見上げました。でも、上には木の枝一つなかつたんです。良い月でしたが」

彦太郎は憑つかれたやうに言ふのです。

「それから何うした。續けてくれ」

「その影法師が、時々出るやうになりました。私の歩いてる時、前を歩いたり、後ろから跟ついて來たり、——私は氣味が悪くなつ

て、夜分は外へ出るのを止してしまひました。すると、今度は家の中で——もう止して下さい。私はもう、こんな話をするのも嫌になります」

彦太郎はプツリと話をきつて、頑固ぐわんこらしく口を緘とぎすのです。

## 解決篇

### 一

影法師に憑つかれる——そんな馬鹿なことと思ひながらも、彦太郎の顔や様子を見ると、それを一概がいに笑ふわけにも行きません。

「その影法師の話は大事なことだ。詳しく話してくれ」

錢形平次は、この臆病さうな息子を追及しましたが、

「でも、私は」

彦太郎はひどく脅<sup>おび</sup>えてゐる様子です。

「心配することはない。影法師がいくら暴れたところで、噛みつくわけぢやあるまい。それどころぢやない、父親の市十郎を殺した奴と、お前を脅<sup>おど</sup>かしてゐる影法師とは、どうも掛り合ひがありさうな氣がしてならないのだよ」

平次は噛んで含めるやうに言ふのでした。

「どんな事を話せば宜いのでせう」

「影法師のことなら何んでも」

平次は言葉少なに誘ひます。

「さう言へば、變なことがあります。影法師が出ると、きまつて、ものの焦こげる匂ひがするんです」

「焦げる匂ひ？」

「木の燃える匂ひと言った方が宜いかも知れません」

平次は深々と考へました。影法師に匂ひがあるといふのは、想像もつかないことです。

「その影法師が誰かに似てゐるといふぢやないか」

「そんなことはありません。大きな島田に結つた、若い女の姿です。——私がさう言ふと、お袖さんに似てゐるだらうと、からか

つた人もありますが、影法師の方は島田しまだまげ髷がひどくこはれて、

兩手を前へダラリと下げてゐるんですもの、お袖さんとは似ちや

居ません」

「誰がそんなことを言ふんだ」

「番頭の才八んです」

あの伶俐者の才八が、彦太郎がお袖に氣があるのを知つて、ちよいとからかつて見る氣になつたのでせう。

「他に氣のついたことは？」

「最初は外を歩いてゐると、私の前を、ヒヨロヒヨロと、影法師が歩いてをりました。ハツと氣が付いて、見定めようとすると、掻き消すやうに見えなくなりました」

「どんな具合に？」

「大地がポーツと明るくなつて、その中に黒い影法師が映るので



す」

「お前の影ではなかつたのか」

「飛んでもない——髪を振り亂した影法師ですもの」

「成る程」

「最初に見たのは、藥王寺やくわうじ前の御馬場で、それから、店の前や、路地の中で二、三度見ましたが、近頃は外へは出ずに、障子へ映つたり、椽側に現はれたり」

彦太郎はさう言つて、精も根も盡き果てたやうに、蒼白く瘦やせた顔を垂れるのです。

「それを誰かに相談したのか」

「相談に乗つてくれる人はありません。親父は相手にしてくれず、

才八どんは笑ふだけ、無道軒さんにきかせると、反<sup>かへ</sup>つて脅かされるにきまつてをります」

さうして彦太郎は、影法師の憑きものに悩まされながら、次第に憂鬱<sup>いううつ</sup>に絶望的になつて行つたのでせう。

「猫又法印は修験者ではないか。話をしたら、憑き物を拂つてくれさうなものだが」

「二、三度頼んで見ましたが、あべこべに脅かされるだけでした。——お前さんは若い女の生き靈<sup>りやう</sup>に憑<sup>つ</sup>かれてゐる。加持も祈禱<sup>きたう</sup>も力及ばない、いづれはその憑きものの爲めに命を奪<sup>と</sup>られるに決つてゐる——などと、怖いことを申します」

「厄介な法印だな」

平次は苦笑ひに濟ませましたが、腹の中では明確に猫又法印の惡意を感じた様子です。

「あの人は誰にでもさうなんです。人を脅かしたり、怖がらせたり、調伏したり、——そんな事ばかりやつてをります。親父があらんな人を手なづけてゐるのが不思議でなりません」

彦太郎は猫又法印の無道軒に對しては、並々ならぬ反感を持つてゐさうです。

「その法印の身性を知つてゐるのか、お前は？」

平次は靜かに、極めて自然に問ひ進めました。

「誰も詳くはしいことは知りません。でも、亡くなつた親父は上方で懇意こんいになつた様子で、いろ／＼のことを知つてをりました」

「例へば？」

「法印は今でこそ修驗者のやうな顔をしてをりますが、もとは長崎あたりで抜け荷を扱つてゐたさうで」

「フーム」

「南蠻人なんばんからいろ／＼の術を教はつて、いつの間にやら修驗者になりすました様子です」

「――」

「一年前にフラリとやつて來て、それから客分とも用心棒ともなく、此處に踏留ふみとどまつてしまひました」

「法印とひどく仲の悪いのは誰だえ」

「番頭の才八で、かげでは惡口ばかり言つてをります。あんな山

師をお店に置いては、ろくな事はあるまいと」

口がほぐれて來ると、彦太郎は臆病らしさに似ず、なか／＼よく話してくれます。

## 二

「親分、ちよいと」

八五郎は椽側から顔を出して、顎<sup>あご</sup>で合圖をしてをります。

「何んだ、何處へ行つてゐたんだ」

「親分が、あの倅と掛け合つてゐるうち、あつしは二、三人達者な奴と逢つて來ましたよ。何しろあの青瓢<sup>あをべうたん</sup>筆野郎と來た日にや、煮え切らなくて、鬱陶<sup>うつたう</sup>しくて、話をしてゐると、痺<sup>しびれ</sup>がきれるで

せう」

「それでどうした」

その煮えきらないのに口をきかせて、平次はいろ／＼の手掛りをつかんだことは、八五郎の分別に想像もつかないことです。

「猫又法印に當りました。主人の殺された部屋の眞つ下に陣取り、下手人を斬り殺すんだと言つて、馬糞臭い抹香まつかうを一升五合ばかりも焚き、獨鈷どっこを横喰へに、揉みに揉んでの荒行ですよ」

「道理で煙いと思つた。それからどうした」

「祈祷の合間を狙つて、あつしも少し禁呪まじなひをきかせましたがね」

「何んの禁呪だ」

「御坊の法術には、自分を祈り殺す術もあるのかえ——とね」

八五郎の目にも、下手人げしゆにんの疑ひは、彦太郎から、猫又法印に

移つて行く様子です。

「怒つたらう」

「怒つたの怒らねえの、あの生なまぐさ腥法印、洒落しやれや皮肉は通用しきうもないと思つたら、身に覚えがあると見えて、ピンと來ましてね、『岡つ引奴、何を言うやがる。俺に何んの怨みがある』とね」

「當り前だ」

「——菊屋市十郎殿は、大檀おほだんな那だ、死なれて困るのは誰だと思ふ。つまらねえ事を言やがると、岡つ引から先に祈り殺してやるぞ——と、大眼玉をクワツと剥むいて、閻魔えんま大王ほどの睨みをきかせましたよ」

「まあ、宜い。それからどうした」

「番頭の才八を呼び出して、あの猫又法印の素姓を調べましたが、たいしたことは知りませんね。長崎で抜け荷を扱つて、主人の市十郎と懇意になり、貸した金の取立てが名人で、調法がられたといふことです。<sup>もつと</sup>尤も大阪にゐる頃は、品玉使ひのやうな妙な祈祷で人を騙し<sup>だま</sup>、散々金も儲けた<sup>まう</sup>が、所の役人にも睨まれて江戸へ逃げて來たといふことでした」

「フーム、話はそれだけか」

「もつと大事なことがありますよ」

「何んだ、出し惜しみをせずに、いつぺんにブチまけなよ」

「番頭の才八が言ふには、主人市十郎が殺された時、伴の彦太郎は、自分の部屋で布團を冠つて、寢て居たと言つたやうですが、



あれは眞つ赤な嘘だといふんで——」

「フーム」

「あの時、彦太郎は、自分の部屋には居なかつたさうで。丁度その時才八が覗いて見たんださうで」

「そいつは容易ならぬことだ。まさか才八が嘘を言つたのではあるまいな」

「あつしも突つ込んで訊きましたが、才八は斯<sup>か</sup>う言ふんです。私の言つたことが嘘か本當か、若旦那に訊いて下さい——現に親旦那が死んだ騒ぎの時、駈けつけた若旦那は、衣紋<sup>えもん</sup>も崩れない平常着を着てゐたと言ひますよ」

「兎も角も、若旦那の彦太郎はその邊にゐる筈だ。もう一度呼ん

で来てくれ」

八五郎は店の方へ飛んで行きましたが、やがて、ひどく澁つて居る彦太郎を、引摺<sup>ひきず</sup>るやうにつれて來ました。

「もう一つ訊きたいことがあるんだ」

平次はそれを、穏やかな調子で迎へました。

「へエ？」

「親旦那が殺された時、お前は自分の部屋で布團を引冠つて寝てゐたと言つたが、あれは嘘だつたね」

「？」

「大騒ぎになつて、驅けつけた時のお前の姿は、寢巻ではなくて皺<sup>しわ</sup>もつかぬ平常着だつたと言ふぜ」

「？」

「あの時お前は自分の部屋に居なかつたに相違あるまい」

「――」

彦太郎は、いぢめられつ兒のやうに、眼を白黒させて黙つてしまひました。

「その言ひわけを訊きたいが、――どうだ」

「――」

平次は暫らく片意地らしい彦太郎の様子を眺めてをりましたが、何時まで待つても、返事をしてくれさうもないので、

「八、若旦那は、誰かに見張らしてくれ。四ツ谷の與吉兄哥あにいの子分衆があるだらう」

「へエ」

八五郎は若旦那の彦太郎を促して、店の方へ行きました。頑固に黙り込んでゐるその後姿を見て、平次は何やら考へ込んでしまひます。彦太郎の様子には憎々しいといふよりは、寧ろ物哀れなものがあつたのです。

三

「親分さん、少し申し上げたいことがあります——」

妙に物柔かい女の聲が、平次を呼びとめました。振り返ると、三十五、六の少しひねた大年増、濡れ手を前掛けで拭きく、言はうか、言ふまいか、まだ迷つてゐる恰好です。

「何にか用事かえ」

それは下女のお萬——と、先刻<sup>さつき</sup>四ツ谷の與吉に引合された筈です。

出戻りの達者な女、よく働く代り、お節介で、おしやべりで、毎々主人や番頭や、妾<sup>めかけ</sup>達にうるさがられてゐる存在でした。

「若旦那が可哀さうで、私はもう、我慢がなりません」

多血質らしい中年女、お節介なだけに、人が良いことでせう。

「若旦那がどうしたといふのだ。知つてることがあるなら、話した方が宜いぜ」

「私もさう思つて、ツイ口を出してしまひました。考へて見ると、親旦那様が亡くなつたことでもあり、誰にも遠慮もないわけでお萬の言葉にも妙に含みがあります。

「さうく、誰にも遠慮もないよ、若旦那がどうしたといふのだ」  
 「あの時——親旦那様が二階で殺された時、——若旦那様が、母<sup>お</sup>屋<sup>もや</sup>の西の端の御自分の部屋にゐなかつたわけです」

「？」

「若旦那様とお袖さんが、お勝手の隣りの私の部屋で、——逢つてゐたんですもの」

「逢引か」

「逢引といった——そんないやらしいもんぢやございません。二人は黙つて手を取り合つて、顔を見合せて、ヂツとして、涙ぐんでゐるんです。可哀さうに」

「——」

「二人はずつと前から、好き合つてゐたんです。でも、お袖さんが、親旦那の持ち物ときまると、それをどうしようといふ若旦那ぢやございません。二人は死ぬほど惚れ合つてゐるくせに、ろくに口もきかずに、顔を見合せて、心で泣いてゐるんですもの」

三十五の出戻り、存分に醜い中年女は、この若い二人のやる瀬ない戀路を、格子に獅噛みついて、大向うから濡れ場を見るやうな熱心さで眺めてゐたのでした。

「二人は時々逢つてゐたのか」

平次も妙に引入られるやうな心持ちで問ひ返しました。

「少しの隙<sup>すき</sup>を見て、誰にも見付けられないやうに、そつと、二人は逢ひました」

「誰も、そんな事に氣がつかなくつたのか」

「随分、氣をつけました。でも、何時ともなく、誰かが二人の素振りを見付けて、口に出して言ふ者もありました」

「例へば？」

「あの猫又法印などは、しやうがい生涯女に持てたことのない人間だけ

に、妬やきやうも大變で」

お萬はなか／＼辛しんらつ辣なことを言ひます。

「主人の市十郎は？」

「法印がつまらないことを告げ口したかも知れません。近頃は若旦那を見る眼が變でした」

「よく、それで彦太郎を追ひ出さなかつたな」



「だつて、若旦那の方が、この菊屋の心棒ですもの。大旦那が若旦那を追ひ出したら、親類方が承知しなかつたでせう。さうでなくてさへ、妾狂ひがひどいので、親類方の噂になつてをりました」  
「ところで、お前はなかく目が届きさうだ。もう一人の妾のお吉には、悪い噂はなかつたのか」

平次は話題を變へました。引出せば、いくらでもこの女から手掛りは引出せさうです。

「新宿で勤め奉公をしてゐる時、あのお吉さんと番頭の才八どんは、深間ふかまだつたさうですよ」

お萬の口邊には、深刻な笑ひが漂たゞよひます。

「お吉は商賣人あがりか」

「どう見たつて、あれは素人ぢやありませんよ。匂ひ袋を身體中にブラ下げて、さはれば、脂あぶらで手がべつとりと濡れさうですもの。氣味が悪くて、私なんかは、同じ盥たらひでも顔を洗はないやうにしてをります」

「てきび手厳しいな」

「男の方は、どうしてあんなヌラヌラした女が好きなんでせう。才八どんなんか、ひとかど通なことを言つてゐる癖に、あのお吉さんを見る目は尋常ぢやありません」

さう言はれると、そんな素振りがあつたかも知れませんが、微妙な消息は平次にも判断がつきさうもありません。

「ところで、死んだ主人は、妙な癖があつたさうだが、夜分、自

分の部屋へ引取つてからは、誰も他の者を寄せつけなかつたことだらうな」

平次の問ひは次第に核心かくしんに觸れて行きます。

「そんなことはありません。誰でも用事があれば呼びつけられて、随分いやなところを見せつけられました。私はお銚子を運んで行きましたし、才八どんは店の勘定が済むと、一應その日の金を出し入れを、旦那様に申し上げましたし、——旦那様は帳尻にはやかましかつたさうです」

「法印は？」

「あれは自分の部屋でお仕着せの寢酒をやつて、獨りで寢てしまひます。旦那がお妾とふざけるところなんか、汚けがらはしいなどと

言つて覗かうとはしません」

「お吉は？」

「お袖さんが居る時は、滅多めったに覗かなかつたやうです。決して顔を見せないのは、お内儀さんとお嬢さんくらゐのもので」

「有難う、そんな事でよからう。お蔭でいろ／＼のことが判つたよ」

平次もお萬の饒舌ぜうぜつには、お禮を言ひたい程でした。中年女の舌を活潑に動かせる動機が何んであらうと、それは問題外として。

#### 四

「八、二人の妾と、奉公人達の荷物を調べてくれ。飛んだところに、極め手があるだらう」

平次は、八五郎と與吉を手傳はせて、家中の者の荷物を調べさせました。

驚いたことに、内儀ないぎのお世乃は一番纏まとまつた金を持つてをり、その次は下女のお萬が物持ちで、番頭の才八と、法印無道軒は殆んど百も持つて居ないことがわかりました。

妾のお吉は、買ひ食ひの小遣くらゐ持つてをり、お袖は母親に貢みつぐせるか、何んにも持つては居りません。

「へエ、あの内儀が百兩と纏まとまつたほまちを持つて居たには驚きましたよ。下女のお萬も十兩近く持つて居たのは、身分不相應ですがね」

八五郎は酔っぱい顔をするのです。

「十兩と纏まつた金は、一本立ちの御用聞の八五郎兄哥も身につけたことはあるめえ」

「口惜くやしいがその通りで」

「尤も、浮氣をする男の配つれあひ偶は、何時捨てられるかもわからないから、大概たいがい無理をしてもほまちを拵こぎへるものだよ」

「そんなものですかね——亭主に張り合つて、パツパと費ひさうなものです」

平次の哲學が、八五郎には急に呑込めない様子です。

「才八が空つ尻なのは、遊びがひどいからだらう」

「正直者だとも取れますね」

「死んだ主人がやかましくて、妾とふざけながらも、毎日の帳尻

は見たといふくらゐだから、思ひの外奉公人達には収入みいりがなかつたのかも知れない」

「ところで、あの猫又法印が、百も持つて居ないのは何んと判じます」

「あわてて隠したのかな」

「へエ？」

「いや、そんな事はあるまい」

「それから、あの猫又法印は威張り返つて、自分の部屋の押入を開けさせませんよ。さいは幸ひ、財布を投げ出してあつたので、念入りに調べましたが」

「兎も角、與吉兄哥あにいに見張らせることだ。俺は通ひ番頭の源介に

立ち會はせて、主人の手文庫と帳場を見る」

平次と八五郎は、源介を呼んで來て、主人の部屋から手文庫を  
持出させて調べましたが、それは金錢の出入帳と證文の外には何  
んにもなく、土藏の中に思ひの外の現金が隠されてゐた外には、  
たいした收獲ありません。

「親分、妙なことがありますか」

八五郎と番頭の源介は、帳場格子の中に首を突つ込んで不思議  
がつてをります。

「何が不思議なんだ」

「この大福帳ですよ。半紙横綴よことぢの分厚な帳面ですが」

「それがどうした」



「お終ひの三、四日分のところを、<sup>むし</sup>撈り取つてあるんです」

番頭の源介は、腑に落ちない様子で、大福帳を撫でてをります。

「枚數にして、どれくらゐだ」

「三枚もあつたでせうか」

「何にか、變なことでも書いてあつたのか」

「そんなことは御座いません」

「御禁制の品でも仕入れるとか何んとか」

「飛んでもない」

番頭の源介は躍起<sup>やつき</sup>となつて手を振るのです。

才八より少し老<sup>ふ</sup>けて見える、同じ中年者ですが、女房持ちで通

ひで、遊び癖のひどい才八に<sup>くら</sup>比べると、ひどく地味な男です。

「金の出し入れに怪あやしいことはなかつたか——そのために主人が命を落すといふことも、ありさうに思ふが」

平次は念を入れました。

「金のことになる、やかましい主人でございました。五文十文の違ひでも、決して容ようしや赦しなかつた方で」

「才八が費ひ込みでもしてゐなかつたのか。大分遊びがひどかつたといふが」

「いえ、金の間違ひはなかつた筈でございます。——尤も才八さんには結構な貢ぎ手もありましたが」

「それは誰だ」

「御主人様が、しつかり給金を出してをりましたから——へエ」

番頭の源介は巧みに誤魔化<sup>たぐまか</sup>してしまひました。才八の遊びの金は、ケチで勝手で、奉公人の遊びなどを、決して容赦しなかつたであらう、主人の貢<sup>みつ</sup>ぎでないことはあまりにも明らかです。

才八のパトロンは、主人の市十郎でないと、それは多分、あのベタベタした妾のお吉あたりでせうか。

「その才八が、亡くなつた主人市十郎の身寄りにでもなつて居るのか」

「いえ、そんなことは御座いません。尤も御内儀のお世乃さんの遠縁に當るやうには伺つてをります」

それは平次にも初耳でしたが、亡くなつた主人市十郎より十幾つも年の若かつた才八は、子供の時から、唯の奉公人でやつて來

たのでせう。

## 五

「親分、願ひしますよ」

又、八五郎が飛んで來ました。

「何がどうしたんだ」

「猫又法印が威張り出して手がつけられません。與吉親分は弱つてますよ」

「よし〜」

平次は氣輕に身を起すと、猫又法印の部屋になつてゐる、奥の一と間に入つて行きました。其處では輪袈裟わげさをかけた無道軒が、腕まくを捲りあげて威張り散らしてをります。

「やい、岡つ引奴、俺が向うの部屋で、下手人調伏の祈禱きたうをしてゐる間に、俺の部屋へ入つて、手當り次第に掻き廻すとは何んといふことだ。この六疊は苟くも佐多田無道軒の城廓じやうくわくだ、中が見たかつたら、寺社の御係りを呼んで来い。町方の不淨役人ふじやうなどが入ると、唯は置かないぞツ」

お経で鍛へた凜々りんくとした聲が、家中に鳴り渡ります。

「御坊、大層な勢ひだな」

平次はヌツと入りました。

「何んだお前は、錢形とか何んとか言はれて、近頃増長した野郎だな」

「お互ひに増長するのは結構なたしなみぢやないよ。ところで、

御坊はこの家の何んだ」

「主人市十郎の用心棒だ」

「用心棒といふと、一期半期の奉公人か」

「ブ、無禮なことを申すな」

「主人市十郎は死んでしまつたぜ。奉公人なら居居つても構はないが、強請ゆすりや居候なら退散するのが本當だ。新しい主人は跡取りの彦太郎、お前のやうな法螺吹ほらふきには用事はないとさ」

平次も我慢がなり兼ねました。

「言つたな野郎」

「口惜くやしかつたら、調伏でも何んでもやるが宜い。第一、ふた言目には寺社々々といふが、お前なんか何處の寺にも人別があるわ

けはない。望みとあらば、寺社の御係りを呼んで來ようか」

「何、何んだと」

「そんな法螺吹き坊主に驚く奴がどうかして居るよ。その押入の中に、何にか忍ばせてあるに違ひない。俺が承知だ。八、構はないから捜せ。大きな聲を出す外には能のねえ野郎だ、怒鳴ったら此方でも怒鳴り返せ」

平次は無道軒を乞食坊主と見破つて、裁き<sup>さば</sup>はきびくしてをります。

「何んにもありませんよ、親分」

八五郎は押入から首を出しました。

「それ見ろ、後の祟<sup>たゝ</sup>りが怖いぞ」

力づくでは叶かなはぬと思つたか、猫又法印、眼ばかり光らせてをります。

「いや、きつとあるに違ひない。若旦那の彦太郎を脅おどかした、影法師の手品は、この部屋に隠してあるに違ひない」

「待つて下さい親分」

四ツ谷の與吉は疊をあげて床下を這ひまはつた揚句あげく、やがて泥棒龕燈がんどうを一つ見付け出しました。

「何んだそれは？」

「泥棒龕燈ですよ。この中に小さい蠟燭ろうそくを立てて、口のところに、切抜きのお化けを貼はつたら、影法師が映りやしませんか」

四ツ谷の與吉はすっかり得意になつてをります。



「いや、そんなことでは自分の姿を見せずに、影法師だけを、遠くの往來や椽側に映すわけには行くまい」

平次はさすがに思慮深く、與吉の假説を押へました。

「ザマあ見やがれ」

猫又法印は面白さうにわめきます。側に平次と與吉と八五郎が居るのでは、力づくでは叶はぬかと思つたか、どうやら神妙に控へてをります。

「親分、妙なものがありましたよ」

八五郎は押入れの隅を這ひ廻つてをりましたが、やがで何やら一と掴みほどさらひ出しました。

「蠟燭の屑が五、六本、あとは桐の薄板で拵へた、何んかの仕掛

物と、——おや、おや？　これはギヤマンの鏡の、水銀みづがねの剥げ  
たのぢやありませんか」

それは不思議な判じものでした。平次はそれを疊の上に列べて、  
黙つて考へ込んでをります。

「御坊は以前、長崎に居たことがあつたさうだな」

「それがどうした」

猫又法印は肩を聳そびやかします。

「長崎で抜け荷を扱つたといふが、オランダ人から、寫し繪くら  
ゐは手に入れたことがあるだらう」

「？」

猫又法印は黙つて眼を光らせました。

「彦太郎を脅かした影法師は、月の良い晩でも、往來の上に明るく光つたものが映り、その中に眞つ黒な影法師が現はれたといふことだ」

「――」

「そして、その影法師が出る時、木の焦げるやうな匂ひがしたといふことだ、――寫し繪に違ひあるまい。オランダ風の寫し繪は、清國しんこくの商人が持つて來て、長崎には澤山入つてゐるといふことだ。法印はそれを手に入れて江戸へ持ち込み、何んの仔細しさいかは知らぬが、彦太郎を脅かして、自滅させようとしたのだらう」

「――」

「八、天てんじやう井が怪しい。箱型になつたものを捜せ」

「よしッ」

八五郎はいきなり天井にもぐり込みました。此處に言ふ『映し繪』又は『寫し繪』は、後の世の幻燈げんとうで、享和年間きやうわほんには、江戸の寄席よせ藝人とらく都樂なる者が興行用に使用了ことが武江年表に記されてをり、それが近代に及んで、淨瑠璃じやうるりなどを用ひもち、劇的な筋を持った影芝居、又は錦影繪にしきかげんとして、明治初年に至つたことは古老がよく知つてゐる筈です。

猫又無道軒はそれを一臺江戸に持ち込み、最初は愚民ぐみんを欺あざむく道具にして居りましたが、後にはわけがあつて彦太郎脅かしおどの道具に用ひ、錢形平次に見出されたのです。

天井裏から、怪し氣な幻燈器械は直ぐ見付かりました。

「サア、坊主、カラクリの寫し繪が出て來たぞ。望みの通り寺社の御係りに引渡さうか」

八五郎はその煙突のある眞四角な黒い箱を差し上げて踊り出します。

「いや、この上は、何んであんな事をしたか、ワケを訊かう」  
平次は問ひ詰めました。

「知らないく、知るものか」

猫又法印は大きく頭かぶりを振ります。

「よし、宜い心掛けだ。何んにも言ひたくなきや、菊屋の主人市十郎殺しの下手人として、送つてやるだけのことだ。——どうせ本當の下手人はお前ぢやあるまいが、この平次が手を引けば、

お前を助ける者はないぞ。それも承知か」

「いや、言ふ。斯うなれば皆んな言ふ。頼んだ相手は死んでしまつた。もう黙つてゐる義理もない」

猫又法印はペラペラとしやべつてしまひました。それによると、彦太郎が臆病で神経質なのを知り、それをウンと脅おどかして自滅させようとしたのは、何んと、殺された菊屋の主人、彦太郎には義理のある仲の、市十郎だつたのです。

彦太郎は憎くもあり邪魔でもありましたが、世間や親類の手前、表向きはそれを追つ拂ひもならず、その上彦太郎とお袖は幼馴をさなな染しみで、今でも清らかな逢引を續けてゐると知つて、腐肉ふにくのやうな色餓鬼いろがきの市十郎は、彦太郎の清純さが憎くてたまらず、無智の

狂信者を騙だましてゐる、猫又法印の寫し繪の詐術さじゆつを利用して、彦太郎をジリジリ殺さうといふ、恐ろしい計畫に巻き込んだのです。「といふわけだ。皆んな主人の言ひ付けで俺の知つたことぢやない」

と、この期ごに臨のぞんでも猫又法印は惡あがきを續けます。

## 六

「親分。すると、主人殺しの下手人は誰でせう」

「矢つ張り、猫又法印ですか」

「いや違ふ」

平次が家の廻り、わけでも風呂場やお勝手を念入りに調べるのを、八五郎は追つかけるやうに訊ねるのです。

「すると、あの弱さうな倅せがれ」

「いや、あの彦太郎ではない——俺には下手人はわかつたつもりだ。キメ手になる程の證據がない」

「縛しばつて行つて二、三十引つ叩けば——」

「お前は亂暴でいけない。證據のない者を縛つて、拷問がうもんにけるのは、町方役人の恥だよ」

「相變らず、弱氣ですね。何を搜しや宜いんで」

「紙きれの片だよ。血の附いた半紙だ」

「紙屑籠ぢやありませんか」

「曲者はそんななまやさしい人間ぢやない。土竈へっくひか風呂の焚たき口でなきや——兎も角、與吉にさう言つて、鼻の良い犬を搜し出



し、ちよいと借りて来てくれ」

「親分は？」

「俺はもう一度市十郎の殺された二階を見るよ。お前も後から来てくれ」

八五郎は四ツ谷の與吉を捜しに飛んで行きましたが、やがて、二階の主人の部屋で、何やら考へ込んでゐる平次のところへ戻つて來ました。

「犬は良いのがあるさうですよ。次は何んです、親分」

「お前は背が高い方だが、主人の市十郎は小柄こがらだったな」

平次は妙なことを言ひます。

「その代りよく肥ふとつてはゐました」

「ところで、お前は、この主人を突き殺した、障子の側、そば刀の穴の前に坐つてくれ。膝を崩して、さうく」

「斯うですか」

八五郎は血飛沫ちしぶきの障子の前に坐つて、氣味悪さうに胡坐あぐらを掻きました。

「ところで、廊下から主人を突いたと思はれる障子の穴は恐ろしく高い、——丁度お前の首のあたりに當るぜ」

「主人の傷は、後から背中かひがらの左、肩胛骨ぼねの下をやられた筈ですが」

「蠟燭ろうそくの灯あかりで障子越しに突けば、少しは見當も狂ふだらうが、それにしてもあんまり違ひ過ぎる」

「それはどういふ者なんです、親分」

「穴が高過ぎるし、血飛沫ちしぶきも少な過ぎる。曲者くせものは障子越しに突

いたと見せて置いて、實は、主人と話をしながら、素知らぬ顔で後へ廻つて、見當をつけて一と突きにやつたのさ。酒に酔よつてゐる主人は、相手のそんな素振りをとがめる氣もなかつたんだらう」

「誰です、それは？」

「主人市十郎に信用されきつてゐる者、主人と妾めかけのふざけてゐるところへ入つても、不思議にも思はれない者——尤もその時お袖は、お爛かんを直すといふことにして階下したへ降りて、彦太郎と逢引ごつこをして居た」

「誰です」

「每晚この部屋へ来る奴、——主人の市十郎を、<sup>うら</sup>怨んでゐる奴、——彦太郎が自身の部屋から抜け出して、お袖と逢引をしてゐるのを見極めた奴」

丁度その時でした。階下の方では何やら、騒ぎが始まつた様子、四ツ谷の與吉の聲が突貫<sup>つゝぬ</sup>けます。

「親分。犬は裏の柔かい土を掘つて、血染の半紙を見付けたさうですよ」

椽側から階下を覗いて八五郎は怒鳴<sup>どな</sup>りました。

「よし、これは店の大福帳から<sup>むし</sup>撈つた紙だ」

平次はそれを承けて立ちました。

「どうしてそんなところに」

「曲者はその大幅帳を主人に見せに來たのだ。主人の市十郎が、それを覗いて見て居るところを後ろから刺した。血は大幅帳に飛沫しぶいたことだらう。曲者はその汚れたところを、半紙二枚だけ引き撈すつた、が焼く隙すきがなかつた。捨てる場所もなかつたので、畑の柔かいところに埋めたのだ」

「すると曲者は？」

「その男だ。與吉あにい兄哥、その男を縛つてくれ」

平次は二階の椽側から、逃げて行く一人の男の後ろ姿を指さすのです。

それは言ふ迄もなく、手代の才八。土地の御用聞與吉は、飛び付いて自分の手柄てがらにしたことは言ふ迄ありません。

主人市十郎に、曾ては菊屋の家付の娘お世乃を奪はれ、更に新宿の女郎だつたお吉を奪はれた才八は、主人市十郎が猫又法印を使つて、彦太郎を自滅させようとしてゐるのを見て、自分もついでサクサ紛れに主人の命を狙つたのでした。

×

×

×

猫又法印の佐多田無道軒は、唯の山師坊主とわかつて遠島になり、お世乃とお染は、淋しく菊屋の跡を立てました。

めかけ

妾のお吉は、多分の手當てを強請つて行方不知、もう一人の若

ねだ

ゆくへしれず

い妾のお袖は、身一つで母の許に歸りましたが、間もなく、あらゆる物を振り捨てた彦太郎が、お袖の長屋へ訪ねて行つて、存分に泣きも口説きもしたことは言ふ迄ありません。

くど

お袖は身を恥ぢて<sup>あま</sup>尻になるなどと言ひましたが、彦太郎は市十郎の眞實の子でなく、市十郎が死んで、菊屋から身を引けば、誰も文句を言ふ者ありません。

「文句を言ふ野郎があつたら、俺が引受ける」  
などと八五郎までが乗出して、若い貧しい二人を一緒にしてやりました。

「良い心持ちだね、親分」  
三十男の八五郎は、自分がまだ獨り者のくせに、こんな呑氣なことを言つてゐるのです。





## 青空文庫情報

底本：「錢形平次捕物全集第三十九卷 女護の島異變」同光社

1955（昭和30）年1月15日発行

初出：「キング」

1952（昭和27）年

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※題名「錢形平次捕物控」は、底本にはありませんが、一般に認識されている題名として、補いました。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：門田裕志

2017年6月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 錢形平次捕物控

影法師

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>